

加精液を80%Percoll/Hank液、および90%Isolate/swimup液の連続密度勾配にそれぞれ重層、3,000rpm、10分遠心した。遠心後、沈査部分0.5mlを培養液で1回洗浄後0.3mlへ再懸濁し、0.7mlの培養液を層積して45分swim-upした後、上層、下層におけるHIV量を測定した。

【結果】 swimup後上層については、Isolate密度勾配洗浄群の2検体中2例にHIV陽性例が認められたが、Percoll密度勾配洗浄群では2検体ともHIV遺伝子は検出されなかった。また、swim-up後下層では、Isolate密度勾配洗浄群は推定HIV濃度平均672copies/ml、Percoll密度勾配洗浄群では推定HIV濃度14.9copies/mlであった。

【結論】 PVP-coated密度勾配溶剤であるPercollは市販されているsilane-coated溶液(Isolate)よりHIV分離効率が優れていることが示唆された。

P1-13.

口腔扁平苔癬における臨床像と細胞傷害性免疫反応の関連

(大学院博士課程4年口腔外科学)

○榎本 愛

(医学総合研究所 病理・画像部門)

佐藤 永一

(口腔外科学)

安田 卓史、近津 大地

(人体病理学)

長尾 俊孝

【背景】 口腔扁平苔癬は、口腔粘膜の慢性角化性炎症性疾患で、網目状・レース状の白色病変を呈し、しばしば刺激痛を生じるため、摂食困難の要因となりうる。副腎皮質ステロイド含有軟膏や含嗽薬などによる対症療法が行われている。組織学的には、上皮直下にリンパ球を主体とする密な炎症性細胞浸潤があり、しばしば上皮内にもリンパ球浸潤が波及する。本疾患では、肉眼形の臨床分類や浸潤するリンパ球の種類に関する報告はあるが、臨床経過を重視した分類は確立されておらず、リンパ球浸潤と臨床像の関連性についても詳細な検討はなされていない。そこで今回我々は、細胞傷害性T細胞および制御性T細胞の浸潤の程度と臨床像との関連について検討したので報告する。

【対象と方法】 2005-2013年に当科で生検を行い、口腔扁平苔癬と診断された123例を対象とした。症例を臨床経過に基づき、初回治療によって症状が改善する軽快群と、繰り返す症状が生じる遷延群の2群に分類した。生検組織検体を用いて、CD8(細胞傷害性T細胞)とFoxp3(制御性T細胞)の免疫染色を行い、CD8とFoxp3陽性細胞の浸潤を上皮内と上皮外領域に分けて評価し、臨床経過との比較検討を行った。染色されたリンパ球の浸潤数は、パーティシャルスライドを作成し、高解像度画像をイメージング解析システムを用いて計測した。

【結果】 各群の症例数は、全123例中、軽快群78例、遷延群45例であった。上皮内に浸潤するCD8陽性細胞数は遷延群に比べて軽快群で有意に多かった($P=0.035$)。また、CD8/Foxp3陽性細胞数比は、軽快群の方が遷延群よりも高い傾向にあった。

【考察】 口腔扁平苔癬の軽快群ではCD8陽性T細胞の浸潤がより強く、また制御性T細胞による細胞傷害性の抑制が弱いことが示唆される。細胞傷害性免疫反応が臨床像を反映している可能性がある。今後、免疫反応を考慮した診断法を確立することで、口腔扁平苔癬の予後推測に寄与できると考える。

P1-14.

樹状細胞療法残渣検体からのCTC検出の試み

(大学：消化器・小児外科学分野)

○征矢 良子、細川 勇一、永川 裕一

勝又 健次、土田 明彦

(東京ミッドタウン先端医療研究所)

高橋 修、田口 淳一、山洞 典正

(北里大学先端免疫治療学講座)

岡本 正人

(鳥取大学医学部附属病院がんセンター)

辻谷 俊一

血中循環癌細胞(CTC)の検出は予後の予見や治療の方針や効果を判定するなど臨床的に非常に有意義である。しかし検出できるCTCはごくわずかであり、培養はもちろん分子生物学的解析さえも困難である。そこでわれわれは樹状細胞療法の際発生する血液成分に着目した。この血液成分とは、装置を用いて特定の血液成分のみを得るアフエレーシスという採血方法から採取されたもののうち樹状細胞に